



知の統合学としての横幹学をめざして

横幹連合 副会長 舘 暲*



横幹連合のニューズレターの巻頭言でも「知の統合学をめざして」と題して同様のメッセージを述べさせていただいたところではありますが、あらためて、この紙上をお借りして、繰り返すにはなりますが同様の考えを述べさせていただければ幸いです。

この横幹連合が誕生したのは、2003年4月7日のこと、爾来6年の歳月が流れました。実は、この横幹連合が発足した2003年4月7日という日は、「鉄腕アトム」の誕生日とされている日です。これは、必ずしも単なる偶然ではありません。この日が選ばれた背景の一つには、鉄腕アトムが、科学技術の粋を集め、人類の知を統合した結果の人工物であることがあげられます。また、アトムの誕生は、人間社会に多くの問題を投げかけています。例えば、人間とは何か、意識とは何か、あるいは、社会における人間と人工物の関係はいかにあるべきかといった問いかけをも含み、それらの問題を解決するためには、自然科学の範囲にとどまらず広く人文科学や社会科学の知の統合が不可欠であることをも示唆しています。このように、鉄腕アトムは、いわば知の統合の象徴ともいえることから、この日は、まさに「知の統合学」を標榜する「横幹学」の船出にふさわしい日であったといえましょう。

さて、そもそも科学という言葉が、分科学という言葉に由来していることから明らかのように、我々は、物事を細かく分けて条件を整理して実験し、理論化することで科学技術を発展させてきました。分科なくして進歩なしと言われるほど、科学技術が進展すればするほど複合領域が増え、新領域も生まれます。その意味で、いわば加速度的に、新しい科学の新領域が生まれるのは科学の必然であり宿命とさ

えいえるのです。

しかし、一方では、このように分科し細分化しすぎた科学技術の弊害も顕著になってきています。あるディシプリンで最適に設計したつもりが、グローバルにみると最適でなかったり、場合によっては最悪になったりする例は、環境問題が好例ですが、それにとどまらず多くの人工物やシステムにもみうけられます。このまま、細分化の一途を辿ったときの結末は想像を絶して悲惨なものとなると思われる。それらを解決するためには、総合的な学問体系、技術体系が必要であることは明らかです。しかも、それは抽象的な議論ではなく、実学をベースとしたものでなくてはなりません。実問題を解決する力のあるものでなくてはならないのです。そのための学問体系を目指すのが、「知の統合学」であり「横幹学」であるといえるでしょう。

つまり、「横幹学」は、総合的な学問体系として、総合的な科学技術と俯瞰的な視座をもった「新しい構成論と設計論の確立」と「実問題の俯瞰的解決」を目指しています。すなわち、「横幹学」は、「人文科学、社会科学、自然科学を横断的に俯瞰し、知の統合のための方法論とツールを明確にし、その体系化をはかるとともに、知の統合を実践してゆくための科学」と言ってもよいでしょう。

従来、知が統合され、大問題が解決したり、新しい人工物が創造されたり、あるいは、科学技術の大発見や大発明があっても、そのことを可能にするための一般的な知の統合の方法論が語られることは少なく、まして、そのための具体的なツールが用意されているわけではありませんでした。それらの知の統合の多くは、一人の人の卓越した直感力や感性や才能に依存したり、優れたリーダーや良いメンバーに恵まれたグループによりなされたり、あるいは、そういった個人や組織が、代々伝える、いわば師弟

*東京大学大学院情報理工学系研究科教授

間の直伝などによっていたのです。

そのような、これまで決して明確にされることのなかった知の統合の方法論を顕在化し、それを、誰もが利用可能にしてゆくことが必要です。それは、「技能」が「技術」となり科学技術が進展した過程の新たな展開ともいえます。かつて、マイスターに弟子入りし、アプレントイスとして体で覚えるしかなかった、あるいは、師匠の門に弟子入りして雑巾がけから始めて、見よう見まねで覚えてゆくしかなかった「技能」が、誰でもが理屈で学び習得できるための理論と方法論と設計論を体系化した「工学」を発展させることで、「技術」に高まってきました。今回の横幹の試みは、特定の人やグループがノウハウのようにして持っている「問題解決」や「意思決定」あるいは「創造」や「新たな知の発見」のためのいわば「技能」を、「知の統合学」を確立することにより、誰でもが理論的に学び実践できる「技術」に高めてゆこうとする試みともいえます。つまり、誰でもが「問題解決」や「意思決定」あるいは「創造」や「新たな知の発見」のための技法を、理屈で学び習得できるための理論と方法論と設計論を体系化した「知の統合学」を目指しているのです。

そして、この知の統合の目的が、「問題解決」や「創造」、「意思決定」あるいは「新たな知の発見」であることから、それぞれの目的のための方法論、組織論、具体的な手法や技法が明確にされ体系化されなくてはなりません。それらをすべて列挙し体系化した「知の統合学ハンドブック」の完成が目標となります。しかし、残念ながら、現在まだその目次すら明らかではありません。既に存在するものと、まだ存在しておらず、従って、オープン・プロブレムとして提起して広く解決を募るべきものなどを明確化して、いわば「知の統合学ハンドブック」の「目次」を作りあげることが緊要であり、その目次ができあがった時、知の統合学が学問として、その第一歩を歩き出すといえましょう。

現実社会においては、2003年4月7日に鉄腕アトムが誕生するには遥かに及びませんでした。しかし、この日に、横幹学を目指す横幹連合が誕生したと、後世の歴史に記されるように、この横幹連合に属する多くの方々の知が統合され、「問題解決」や「創造」、「意思決定」あるいは「新たな知の発見」のための一般的な道筋を与える知の統合学としての「横幹学」が発展してゆくことを願ってやみません。